

主 題：七つの教会への使信4、テラテラ教会一罪を放任し続けた教会  
聖書箇所：黙示録 2章18-29節

きょうは黙示録2：18-29、テラテラの教会への神様からのメッセージをご一緒に学んでまいります。七つの教会への神様からの使信の中で、このメッセージが一番長いのです。それでいてこの教会のことはよくわかりません。しかし、大切なメッセージがこの中に記されているので、ご一緒に注意深く学んでまいりたいと思います。

#### A. 「主の使信」 18節

##### 1. 宛先：テラテラ

まずいつものように、この使信はだれがだれに対して送っているのか——。その宛先と送り主が18節に「また、テラテラにある教会の御使いに書き送れ、『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。』と出ています。この手紙の宛先はテラテラという町にある教会です。ここは非常に商業が発達したところでした。というのもペルガモとサルデスを結ぶ道路、またフィラデルフィアとラオデキアに伸びる道路に面したところにこの町はありました。どんな商業が栄えたのかは後で説明しますが、染色業や毛織物の取引の中心として非常に栄えたところでした。染色業と言うと、使徒16章の中で紫布の商人であったルデヤという人物のことを思い起こされるかもしれません。使徒16：14に「テラテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女」がいたと出て来ます。彼女もこの町の出身でした。そして染物でもって生計を立てていたことが聖書に記されています。このテラテラという町にある教会にこのメッセージが送られています。

##### 2. 送り主：

だれがこの手紙を送ったのか——。18節を見ると主に関して三つの説明がなされています。

一つ目は「燃える炎のような目」を持っていると、二つ目、「その足は光り輝くしんちゅうのよう」であり、そして三つ目に「神の子」と記されています。これは1章の中でヨハネが見た幻に基づいて記されています。

##### 1) 「燃える炎のような目」 1：14

一つ目の「燃える炎のような目」というのは、1：14に出てきますが、これは主はすべてのことをご存じである全知のお方であるという意味でした。

##### 2) 「光り輝くしんちゅうのような足」 1：15

そして「光り輝くしんちゅう」のような足というのは、神のさばきを象徴していると我々は学んで来ました。これは教会の中で罪を犯している人たちをさばかれる存在で、神は教会をきよめられるお方であると記されています。

##### 3) 「神の子」：

三つ目に出て来たのが「神の子」という表現です。1章の中ではイエス様のことを「人の子」と言い、この2章になると、「神の子」と言われている。黙示録の中で「神の子」と記されているのはここだけです。

1章の中で「人の子」と言われた時に、それはイエス様が人であるということを強調するためにそのような表現を使ったのだということを見てきました。神でありながら人としてこの世にお見えになり、我々の罪を贖うために十字架にまで従って行かれた。主イエス・キリストの人間性、またイエス様の謙虚さを我々は学んだわけです。このメッセージは、この教会のクリスチャンたちにとって大きな励ましでした。彼らは信仰ゆえに大変な迫害を経験していました。イエス様が私は「人の子」と言われ、私はあなたたちが経験している苦しみを、悲しみを、痛みを全部理解することができるのだと言われているのです。ヘブル2：18に、「主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。」と記されています。主ご自身が試みを受けて苦しまれたから、あなたたちの苦しみを理解できる。そんな方が私たちの神であることをこの手紙の読者たちはどんなに喜んだことでしょう。私の神様は一生懸命説明しても私のことを理解してくれない、私の苦しみをわかってくれない方ではない。この神は私たちが経験するさまざまな痛みも悲しみもわかってくださる方で、そういう存在なのだということを最初に教えたのです。

この2章になると、今度は「人の子」ではなくて「神の子」と言われた。今度はイエス・キリストの神性——イエス様が神であるということを強調しています。このお方はあらゆる悪に対して正しいさばきを下され、すべての被造物が恐れるべきお方である。なぜならこの方はすべてのことを知っておられ、どんな罪でも確実に正しくさばかれるお方だからと。

#### B. 「主の評価」 19節 「知っている」 2・9・13・19

19節には、この教会に対する主の評価が出ています。称賛に価することが19節に、そして非難に価することが20節に出て来ます。

### 1. 称賛に価すること 19節

まず19節「わたしは、あなたの行ないとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行ないが初めの行ないにまさっていることも知っている。」、また「知っている」という動詞が出て来ました。これまで見て来た使信の中で、この「知っている」ということばが文頭に出て来ていることを説明して来ました。私はすべてのことを知っているということを神は強調されているのです。2:2にも、9節にも、13節にも、今見ている19節にもそのことばが文頭に出て来ています。このテアテラ教会のすべてのことを私は知っていると。その神が正しい評価を下されるわけです。

この教会のすばらしいところが挙げられているのですが、「あなたの行ないを知って」いると言っています。評価に価する、称賛に価するその五つの「行ない」がどういう行ないなのか、この後に記されています。

#### 1) 「あなたの愛」 Iヨハネ5:1

一つ目は「あなたの愛」と記されています。この教会は愛の教会でした。神を愛し、そして兄弟たちを愛していました。この七つの教会の中で愛が称賛されているのはこの教会だけです。神様の愛というのは、まさにそこに足がついているような、そこに翼がついているようなものです。つまり神の愛というのは行動を生み出すものです。神様はあなたや私のことをただ愛したと言われただけではない。愛して行動を起こしてくださった。ひとり子イエス様を送ってくださり、十字架にかけ、その死からよみがえらせることによって本当に愛されていることを明らかにしてくださり、我々に最も必要な罪の赦しを備えてくださった。神様の愛というのは、そのように行動が伴ったものです。主がこのテアテラの教会に対して、あなたたちの愛を知っていると、それをほめておられる。なぜかというと、彼らの愛はまさに神の愛と同じように行動を生み出していたからです。Iヨハネ5:1で「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」と、救いに与った人々、クリスチャンというのは神を愛するだけではない、神によって救われた人々、兄弟姉妹たちを愛するのだということが記されています。まさにそれを実践していた教会だと言うのです。だから神はこのテアテラの教会を褒められたのです。私たちがそのことを模範にしたいですね。浜寺聖書教会という教会を見た時に、ここには愛があると、あなたたちが愛を実践していること、それが私があなたたちの教会に関して褒めるところだと主が言ってくださったら、どんなにうれしいでしょう。このテアテラ教会というのはまず愛において称賛された教会でした。

#### 2) 「あなたの信仰」

二つ目に「信仰」ということばが出て来ます。このことばは神に対する信頼と見ることができるところですが、ここには誠実や忠実という意味も含まれています。ですからある人々はこのテアテラ教会のクリスチャンたちは、主に対して本当に忠実に、誠実に歩み続けたことが称賛されているのだろうと言います。しかし、どうもここで称賛されているのは、彼らが主を信頼し続けた、その信仰面においてだと見て取れます。なぜかというと、神を愛し、神に信頼を置いた彼らは、この後に出て来ることば、「奉仕」や「忍耐」を行動をもって表しているからです。ですから、この「信仰」ということばは、迫害の中にあって、どんな時でもこの人々が主の約束を信じ、その約束に立って生きていたと教えているのです。我々も何があっても神のおことばに立ち、神がこう約束されているから、私はその約束に立って歩んで行く、そういう信仰者でありたいです。

#### 3) 「あなたの奉仕」 Iヨハネ3:17-18

三つ目に出てくるのが、「奉仕」ということばです。これを辞書で調べると、聖徒に対する、クリスチャンたちに対する、兄弟姉妹に対する愛の奉仕であると訳しています。教会でいろいろな奉仕をしていたというのではないのです。このテアテラ教会のクリスチャンたちは、周りにいる兄弟姉妹たちの必要にこたえようとしていたということです。Iヨハネ3:17-18に「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」とあります。神が望んでおられる愛は、ことばだけの愛ではないと聖書は教えます。行動に表すことです。恐らく「主よ、どうぞ私を用いてください」という祈りをもって歩んでおられる方は、神が皆さんの心の中に確実に重荷を与えてくださることを経験されていると思います。必要にある人を示してくださったり、そういう人に何とか働きかけて彼らの励ましになろうとしたり。ここで言われている「奉仕」というのは、教会の人々が、教会の中にある必要を覚えている皆さんのその必要にこたえようとしていたということを私たちに明らかにしています。

#### 4) 「あなたの忍耐」 ヤコブ1:3-4

四つ目に出て来るのは「忍耐」ということばです。彼らはさまざまな迫害の中、耐え忍んでその重荷のもとで信仰にとどまり続けていたと。ですからこのテアテラ教会の人たちは大変な困難の中、彼らは信頼を置いて、神を信じて、忍耐をもって主に従い続けておられたと。ヤコブ 1:3-4に「信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」とあります。我々信仰者に必要なことは、毎日の生活で経験するいろいろな試練の中で、しっかりと主を信頼して歩いて行くことによって、我々の信仰が成長して行くことだとヤコブが教えています。まさにそのような歩みをしていたのが、このテアテラ教会の人たちでした。

## 5) 「あなたの成長」

5番目に出て来るのは、この人々の信仰の成長のことです。「あなたの近ごろの行ないが初めの行ないにまわっていることも知っている。」とあります。つまりテアテラ教会のクリスチャンたちは信仰において確実に成長していたということです。ですから主は彼らの信仰者としての歩みを称賛しておられる。あのエペソ教会を思い出していただきたいのですが、エペソ教会は聖書の知識においてはすばらしい教会でした。しかし、その信仰は成長ではなくて後退していた。「初めの愛から離れてしまった」と主が厳しく責めておられました。私たちが覚えなければいけないことは、主を知ること、つまり知識を蓄えることは大切なことですが、知識だけ蓄えたとしても、それによって主を喜ばせることはできないということです。私たちが考えなければいけないのは、信仰が成長しているかどうかです。主イエス・キリストを信じ、この救いに与った時から何年も過ごしてきた自分の信仰が成長しているかどうかです。学んだ聖書の知識が自分の生活に反映されているかどうか、私自身が、あなた自身がよりキリストに似た者へと変えられ続けているかどうか、そのことを我々は考えなければいけない。皆さんの信仰は生きていますか？神が与えてくださる信仰は、あなたのうちで大きな力となって大きな実を实らせて行くものです。もちろんそのためには我々は神の前に正しく歩いて行かなければいけない。このテアテラ教会はそのように神の前に正しく歩み、彼らの信仰は成長していた。そのことを神はご存じで、そのことを称賛しておられる。

## 2. 非難に価すること 20節

これだけ見ると、私たちが模範とすべきすばらしい教会であったことがわかります。でもこのすばらしい教会にも実は非難に価する問題が存在していたということが20節の中に出て来きます。20節「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。」、「イゼベル」という女性のことが出て来ます。

### \* 「イゼベル」とは？ I列王記 18:19-21

この「イゼベル」という名前を聞いて、北王国イスラエルの王アハブの妻イゼベルを思い起こされるかもしれません。I列王記 16:31にその名前が出て来ます。彼女はシドン人の王エテバルの娘でした。そして彼女によって北王国イスラエルに偶像崇拜が持ち込まれたのです。あのエリヤがカルメル山の山頂にバアルの預言者とアシェラの預言者を呼び集めて、どの神が本当の神なのかを試そうとしたやり取りがI列王記 18章の中に記されています。そこに集まった預言者の数は、バアルの預言者は450名、アシェラの預言者は400名、合計850名です。この預言者たちがどのように養われていたのかというと、「イゼベルの食卓につく」(I列 18:19)とみことばは教えてくれます。イゼベルが養っていたのです。そして彼女によってイスラエルは偶像崇拜を行なうようになったのです。

もちろん、このテアテラ教会にそのイゼベルがいたという話ではありません。しかし、象徴的にこの名前が使われています。しかもこの人物の本当の名前が何だったのかもわからないのですが、このアハブの妻イゼベルがしたのと同じように、この教会の中に大変な悪影響をもたらしていた、もっといえばこの教会が罪に陥るのを率先していたのが彼女であったと言えます。この女性に関しては20節のところに「この女は、預言者だと自称している」と書いてあります。預言者と言いながら、実は神のことばを教えるのではなくて、偽りを教え続けていたわけですから。偽りを教えるだけではなく、「不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べ」るように教え勧めていたのが彼女であったとみことばが教えます。彼女は、この教会のクリスチャンたちが主のみこころに従うのではなく、それに逆らうように教え、過ちに導いた人物でした。教会が神の權威に従って行くのではなくて、人間の權威に従って行くように教えていたのが彼女であったと。また、不道徳を行なうことを奨励し、偶像に捧げた肉を食べるようにと誘惑していたのも実は彼女であったと。これはこの教会だけの問題ではなく、実はペルガモ教会にも同じような問題があったことを我々は見て来ました。

## ◎ 背景

さて、彼女がこの教会の中で行なっていた誤った教えを理解するために、我々は職業ギルドの存在を理解しなければいけません。ギルドというのは同じ業者が集まる組合のようなものです。これは11、12世紀の中世で出て来るのですが、実はこの時代にもそういうものが存在していたと言われています。

この町にはいろいろな商業が栄えていたという話をしましたが、いろいろな業種がありました。羊毛業者や亜麻を原料とした繊維——リネン業者、上着を製造する業者、染物業者、皮細工を行なう業者、皮なめしの業者、そして陶器を製造する業者と、たくさんの業種が存在していて、それぞれにギルドが存在しました。なぜこれが問題かという、このギルドにはそれぞれ守護神、偶像が存在していたのです。ですから、そこに加わることによって、偶像に捧げた食べ物を神様からのお恵みだと言って食べなければいけなかったり、祭りを行なった時には、性的不品行——淫行がつきものだったのです。そういう中で彼らは神に喜ばれる選択をしなければいけない、そういう社会だったということです。ある先生は「組合から脱退すれば、地位と社会的立場を失うことである。困窮、飢え、迫害に見舞われることもあろう。他方ギルドにとどまって不品行な宴に加わり、偶像に備えた物を食べ、淫行に身を任せれば、それは主を拒むことになる。」と言われます。こういう葛藤の中に彼らがいたということです。彼らとしてみれば、自分自身の家族を養って行こうとすれば、ギルドに加わらなければいけなかったのです。生活をするためにも、自分がそこにあって出世しようとするならば、このギルドに加わらなければいけなかった。でもそこに加わることによって、自分の信仰に妥協をもたらしてしまう危険もあったのです。

こういうことを少し頭に入れながら、このイゼベルはこんなことを教えていたとバークレーが言います。「クリスチャンはこの世に適応すべきで、この世の習慣のことごとくをそれほどまでに厳しく退ける必要はない。クリスチャンは一般に行なわれている職業上の、また商売上の慣習を拒否する必要はない。クリスチャンはそれほどまでに高い倫理的、道徳的基準を守る必要はない。クリスチャンはこの世と妥協しなければならない。別のことばで言うならば、彼女は肉体的な不品行を必ず引き起こす霊的な不品行を教会に勧めたのである。」、これが彼女の教えでした。生活をするためだから構わないじゃないか。出世するためだから構わないじゃないか。そうしてこの人は教会の中の信者たちが神の前を正しく歩んで行くのではなくて、妥協して生きるように教えをなしていたのです。

#### \* 教会の問題

この教会の大きな問題は、こんなことを教える人を野放しにしていたことです。「イゼベルという女をなすがままにさせている。」と、20節に記されていました。それが教会の問題だったのです。本来なら教会はこの人物に対して、あなたの言っていることは聖書に反することだと言って悔い改めを命じ、変わらなければ除名し、追い出さなければならなかった。ところが残念ながら、このすばらしい教会はそれを怠っていたのです。

#### C. 「主の警告」 21-23節

そこで21節以降主の警告が記されています。「わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしなさい。」、彼女に対しての悔い改めの勧めは記されていません。みことばが教えるのは彼女に対して主は寛容を持って悔い改めの機会を与えたけれども、彼女がそれを拒み続けていた様子が記されています。そこで、彼女と彼女に従う者たちに対するさばきが22-23節に記されています。さばきの対象が三つ記されています。そしてそれぞれに対するさばきの種類も記されています。その三つを見て行きましょう。

##### 1. 「この女」 22節

まず一つ目は、イゼベルに対するさばきです。22節「見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。」とあります。実はこのように訳されているのですが、この「病」ということばは原語には出て来ていません。これは補足されています。ですから「この女を床に投げ込む」というのがここに記されているさばきなのです。どんなさばきなのかということで、訳者たちは「病」ということばを加えたのです。きっと神様のさばきというのはこの女性が「病」に陥ることだと。ただの軽い「病」ではないでしょう。なぜかという、その後22節の中に「大きな患難」ということばが出て来ます。「病」としても大変重い病にこの人物がかかると見ることも確かにできます。

また「この女を床に投げ込む」というのは、死についての話かもしれない。Iコリント11章の中に出て来るように、罪を悔い改めなければ病に陥るだけではない、肉体的な死を経験することがあることも警告されています。ここで主はそのことを警告されたのかもしれない。

もう一つ言えるのは、これは永遠のさばきに至るという話ではないのか。なぜかという、この「投げ込」むということばは、永遠のさばきに「投げ込」むという時に使われることばだからです。例えばマタイ7:19で、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」とあります。またマタイ18:8にも「あなたの手か足の一つがあなたをつまずかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちにはいるほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことである」とあります。この「投げ入れ」るということばも永遠のさばきへ「投げ入れられる」ということで、そのさばきを警告しているのかもしれない。いずれにしても我々が言えることは、大変なさばきがこの女性に約束されているということです。

## 2. 「この女と姦淫を行なう者たち」 22節

二つ目、22節を見ると「また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込まう。」と書いてあります。これは患難時代の話ではありません。この地上にあって大変な災難や苦悩を経験するという事です。彼女の教えに同調して大変な罪を犯している者たちに対する警告です。その話を聞いて、それに同調し、同じようなことをしているクリスチャンたちに対してこのようなさばきが警告されている。

## 3. 「この女の子どもたち」 23節

そして最後に出て来るのが、23節「また、わたしは、この女の子どもたちをも死病によって殺す。」と書いてあります。この「子どもたち」というのは実際に彼女が産んだ肉体的子どもたちではありません。これは彼女の弟子たち、その教えに積極的に従っている者たちのことです。「死病」とありますが、恐らく何か疫病的なものによって死を経験するのだろうと。

## 4. その理由 23節

このような三つのさばきがここに記されていますが、主が何のためにこのようなことを記したのか——。その理由、意図まで記されています。23節「こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう。」と書いてあります。主がこのようなさばきを約束された意図は、主が全知の、すべてのことをご存じである審判者であるということとを明らかにするためです。主はすべての人々の心の中までご存じだから、23節「あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう」と言われたことが実現可能なのです。すべてのことをご存じである神だから、あなたたちの行なっていることに応じて報いを与えよう。どういう神であるのかを明らかにするために、このようなさばきが起こるということを明らかにしたと神はお教えになったのです。

## D. 「主の奨励」 24-25節「敬虔な信仰者たちのため」

このような警告が示されて、今度は24-25節で、こういう大変な中にあっても信仰を守り続けている敬虔な信仰者に対する主の奨励が記されています。24節「しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知らないあなたがたに言う。」、こういった誤った教えに惑わされていない人々、イゼベルの教えに従わないだけではない、「サタンの深いところ」を知らない人々に対するメッセージだと書いてあります。恐らくイゼベルは神様の深みを教えていると言いながら、この教え自体はサタンの教えでした。神の深みではなくてサタンの深みを教えていた。

ここに記されている「サタンの深いところ」とは一体何のことかです。実はこういう教えがあったのです。バークレーが教えてくれるのですが、「神の恵みを真に感謝するためには、人は罪の深みの真相をまず知らなければならない。神の恵みを本当に感謝するには、罪の深みを知ることが必要であり、人にはあらゆる種類の罪を経験してみる義務があるのだ」と。この辺で我々はこれは危険だと赤旗を挙げるわけです。「本当の鍛錬とは、からだを罪にうずめながら精神と靈魂をきよく保つことである」と、彼らは教えるのです。また「本当に偉いのは、快楽にふけりながら、その限界を守り、その虜にならないことである。」と言うのです。この「サタンの深いところ」とは何かというと、彼らはこんなことを教えたのです。あなたの心を正しく保っていたら、罪を犯しても大丈夫だと言うのです。神の教えではありません。まさにこれはサタンが望んでいるものであって、こういった教えをこの人物は教会の中で教えていたのです。先ほどの話を思い出してください。彼らは大変なプレッシャーの中にいたことは間違いないのです。この組合に属していなければ仕事を失うかもしれないし、この組合から除名されてしまったら、どうやって生活して行っていくかもわからない。でもそこにとどまり続けるのは大きな葛藤があって、いつも摩擦を経験している時に一番ありがたいメッセージは、妥協したっていいよ、罪を犯してもいいよ、そういうメッセージです。彼らはそういうメッセージを語っていたのです。

## 1. 「他の重荷を負わせない」 使徒15:28-29

でも感謝なことにこの教会にあって、イゼベルの教えや「サタンの深いところ」をまだ知らない、またはそういうものを拒んでいる信仰者たちがいました。その人々に対するメッセージを見てください。「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。」と、主が何を言われたか——。今あなたたちがやっていることで十分だと言っているのです。今していること以上に重荷を負わせないと。これまでも、また今も、イゼベルの教えに妥協しないで忠実に歩み続けている信仰者に対して、これからも闘いは続くよ、だから今歩んでいるように歩み続けて行きなさい。今あなたたちがやっていること以上に、ほかのことをあなたたちに要求はしない。今やっているように歩み続けなさいと。

## 2. 「あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい」

だからこう続くのです。「ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。」と。今あなたたちがその教えに従って主に対して忠実に歩み続けているように、みことばの真理に基づいて歩み続けて行きなさい。私はそれ以上のことを要求しないと、彼らを励まされるのです。

## E. 「主の約束」 26-28節

26-28節を見ると、クリスチャンに対する主の約束が記されています。「勝利を得る者」とあります。クリスチャンたちの話です。またそのクリスチャンに対して「また最後までわたしのわざを守る者には」と続いています。救われている人の特徴です。大変な苦しみもあって、時には罪を犯してしまうでしょう。でも救われている者たちはその中であって神が喜ばれることを継続して行ない続けて行こう、皆さんそういう思いがありますでしょうか？イエス様によって救われている人は、救われてから一回も罪を犯していないのではなくて、日々の生活においていつも罪との葛藤を経験している者たちです。そして私たちは時に罪に敗北をします。でもその時に神が示してくださるその罪を告白して、神の前を正しく歩み続けて行こうとする、その繰り返しです。だからここに「また最後までわたしのわざを守る者」と記されていたのです。失敗しても主のみことばに従い続けて行く。そのように歩み続ける者、つまり「勝利を得る者」、救われているクリスチャンたちの話です。

その人たちに二つの約束があります。

### 1. 「諸国の民を支配する権威」を与える。 詩篇2:7-9；黙示録20:4

一つは「諸国の民を支配する権威を与えよう。」とあります。「彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。」と書いてあります。実はこの27節は、詩篇2:7-9のみことばが引用されています。これは千年王国の話です。主イエス・キリストがこの地上に帰って来られて、千年の王国を築かれる時の話です。そしてここで、「勝利を得る者」、クリスチャンたちに神が与えられた約束は、主が治められる千年王国において、あなたたちも主とともに治めるのだという約束です。この地上の王国において救われている者たちはイエス様とともにこの地上の王国を治めて行くと。イエス様が「わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じ」ように、神ご自身がその権威を信仰者であるあなたに与えると。一つ目の約束は、イエス様がこの地上に戻って来られて王国を築かれる千年の間、救われた者たちがイエス様とともに諸国を治めるという祝福が記されています。

### 2. 「明けの明星」を与える

二つ目は、28節に「また、彼に明けの明星を与えよう。」と書いてあります。これには幾つかの説があります。

#### 1) 主イエス 黙示録22:16；Iコリント13:12

この「明けの明星」というのは、確かに黙示録22:16にイエス様ご自身が「わたしは……輝く明けの明星である」と書いてあります。だとすれば、ここで約束されていることは、イエス様とともにその人は永遠を過ごすという話です。我々がその約束をいただいているのは確かです。クリスチャンはイエス様とともに永遠を過ごします。

#### 2) 再臨 マラキ4:2

二つ目の説は、これは再臨の話だろうと言うのです。というのは、この「明けの明星」というのは明け方東の方に見える星、金星の話です。明るく輝いている星の話です。太陽が上る前にこの星が輝くのです。イスラエルの人々は「義の太陽」が上るのを待っています。マラキ4:2に「しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、」と書いてあります。神の話です。ですからイスラエルは、神がこの地上に戻って来られるのを待っているのです。その前に星が輝くのです。地上に戻って来られる前に、神が我々クリスチャンたちを迎えに来てくださる、その話ではないかと。だから「明けの明星」というのは、日が上る前にこのような祝福に与るということで、神が地上に戻って来られる前に私たちを迎えてくださる再臨の話ではないかと。

#### 3) 信者が主の栄光を現わす マタイ13:43

それも納得できるのですが、恐らく三つ目、クリスチャンたちが主の栄光を現わすということだろうと思います。マタイ13:43に「そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。」と書いてあります。「明けの明星」というのは、地上の王国において義なる者、救われた者たちは星として輝くという約束です。この千年王国において、救われている私たちはそこで太陽のように輝いて、神様の栄光を現わすと言うのです。なぜそれがここで言われていることかと思うかという、一つ目の約束は千年王国においてイエス様とともに治める話だからです。この「土の器」——主に逆らう個人や国々が、「鉄の杖をもって器を打ち砕く」——それらは主によってさばきを受けるという話です。ですからここで言われていることも千年王国において私たちクリスチャンたちは神様の栄光を現わす、そうして主とともに千年を過ごすのであるということをおそらくここで言われたのだと。いずれにしろこのような祝福がクリスチャンであるひとりひとりに約束されています。

## F. 「使信への傾聴」 29節

そして最後に29節、使信に耳を傾けるようにと、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」ということばが出て来ます。神のメッセージに耳を傾けなさいということばが繰り返されています。そ

れが最後にまた改めて教えられています。

きょうのメッセージの中で私たちは何を学んで行くべきか——。この教会はすばらしかったですよね。愛においてもすばらしかった、実践していました。どんな時でも主を信頼していました。愛を行動に移していましたから、教会の中で兄弟姉妹が困っていると、彼らは率先して助けをなしました。どんな時でも主のおことばを信じ、忍耐をもって主に従い続けていた。そして彼らの信仰は成長していた。すばらしい教会です。そんな信仰者にあなたや私を変えられて行くことを望みながら歩んで行く。しかし気をつけなければいけないのは、主の教えでない教えが教会の中に居座り続けるのを我々は許してはいけないということです。主のみことばに反する教えに対して私たちは厳しくなければいけないということです。そういったものを追い出さなければいけない。そういうものに耳を傾けてもならない。私たちの信仰の土台は聖書です。これが私たちの物差しであり、これによって私たちは判断をしなければいけない。

模範が示されました。警告が与えられました。それをしっかり心に刻んで、与えられたこの日を主に従い続けて行くことです。天に上がってすばらしい祝福をいただくために私たちは忠実に生きようとするのではない。きょうも見て来たように、神様によってあがなわれたことを覚えている人たち、そのことを感謝している者たちというのは、その神への感謝が動機となって神に従い続けて行く。どうぞ信仰者の皆さん、主があなたに与えてくださったすばらしい救いを思い出してください。また思い続けてください。そしてそれに私たちはどうこたえて行くのか。毎回私たちは同じことを繰り返します。なぜかというと、我々の信仰生活というのは、この神様のなしてくださった恵みに対する応答だからです。感謝をもって与えられた恵みを、祝福を喜びながら、どう感謝を現わして行くのか——。そのことを考えて、神が望んでおられる方法、みことばに従うことをもってあなたの感謝を現わし続けてください。